「現代建築革命」進行中

在瀋陽総領事
松本 盛雄
まつもと もりお
一九五二年生まれ。七六年外務省入省。アジア局中国課、在中国大使館などで一貫して中国問題を担当、二〇〇八年より現職。著書に『中国色とりどり』がある。

高層ビルの建設が続く、瀋陽市渾南地区

瀋陽市の南を渾河という川が東西に流れている。この川はかつて「瀋水」と呼ばれ、その北側（「陰陽」の「陽」で、太陽に面している方向）に位置することからここを瀋陽という。瀋陽故宮は一六二五年に清朝の太祖ヌルハチが建設を始め、息子のホンタイジ（崇徳帝）の時代（一六三六年）に完成する。その中央に位置する鳳凰楼の最上階からこの瀋水とその向こうに沈む夕日が眺められたというが、現在は多くの高層建築に遮られて見えない。

いま瀋陽への来訪者は空港から市内へ向かう片側四車線の高速道路沿いにこの渾河の南側地区（「渾南地区」）で進んでいる建築ラッシュを見るだろう。至るところに大型クレーンが立ち並び、高層ビルが次々に出現している。そして、その間を縫うように新しい道路が一直線に敷設され、大連・ハルビン間を結ぶ高速鉄道の駅も整備されつつある。

この建築の中心は二〇一三年に当地で開催される「全国体育大会（国体）」の選手村などの施設である。これを契機に市の行政機能をこの地域に移転し周辺七都市と合体した人口二四〇〇万の新都市圏をつくろうという構想だ。この「全国体育大会」は特別な意味を持っている。それは、二〇一二年秋の中国共産党大会で現指導部が大幅に交代し、その後まもなく開催されるこの全国的な大型イベントに新指導部が顔をそろえるとの期待があるからだ。しかも新たな国務院総理への就任が有力視されるのが、遼寧省共産党委員会書記を務め、現在「遼寧沿海ベルト経済開発計画」や「瀋陽経済区」といった国家レベルの戦略を強力に後押ししている李克強常務副総理なのだ。

李副総理が当地で共産党委員会書記を務めていた当時、その下で秘書長だったのが、現瀋陽市共産党委員会曽維書記だ。曽書記の提唱で目下この渾南地区を中心に「現代建築革命」が進められている。瀋陽市をはじめ中国東北三省の厳冬は有名だ。最も寒いときには瀋陽市でも零下三〇度を下回る。このため一一月から翌年四月までの半年間は建築工事がストップする。冬場は現場でのコンクリート打ちなどの作業ができないからだ。このような「半年休業」の状況を打破するために白羽の矢が立てられたのがＰＣａ工法と称する日本の建築技術だ。工場で生産した壁や柱などの部材を現場で組み立てるこの方法を取り入れれば冬でも工事が進められる。そればかりか、従来は現場での作業がほとんどだったので、建物の品質もばらばらで、手抜きやずさんな工事も後を絶たなかったが、モジュール化の導入でこのような問題も減る。

曽書記は私にこの政策を熱く語ってくれた。この曽書記の熱意に日本の大手建築企業も動かされ、このところ当地に進出する建築関連企業が急速に増えている。ある大手日本企業の責任者は、同社が戦前にこの地で満鉄工事を実施した際の記念写真を瀋陽市側から見せられたのには驚いたという。同社でもすでに散逸していたこの写真を見ると、中国側の過去に対するわだかまりより、新しい時代の「革命」を一緒にやりたいという意気込みを感じたという。

テレビの有名な解説者が、古い建物を取り壊しては新しい建物を造っているのを皮肉って、「中国＝拆那（中国語で「取り壊そう」の意。発音は「チャイナ」）」といって大いに受けたそうだが、現代建築革命が瀋陽市から全国に広がっていけば、建物の寿命も延び、環境にも優しい新たな建築産業が発展し、この「チャイナ」も昔の話になるだろう。■